



一七ち日及ふ夜夢とく替つとく枕の上ふく給ひ觀世之男
 却告ちて明日あはれ老人到ふ是則名西とまひて良薬を貰ひ
 服にべと娘の夢さめ驚き拜し翌日早て舟來り薬を乞
 一其右の追く全快ふ起りて朦朧の詠とよふまみの存道
 天に通し歎も有き一段の讀る記者も述り
 ○四を著れ林本のうらたよあはれてよめる
 炭水

奥山小抱
 踏の浅草
 の境内廣記
 其わとよふ淡き
 渡世の水茶屋ハ山の
 宿墨田徳次郎が娘
 おそみ心をうへ厚きれど
 志まて立て度の活計も方どる
 尚哀とあつ中お母親 脹満の難
 病の床ふけなごとも函師ふかけき
 手だてもあ心を激し倅ひ
 近き近経も導きさ久親
 言堂ゆえ且祈願をさあ
 傍目もまはに不亂の
 孝心深切天に通下
 てや

編纂人 女場若菜
 前田 徳次郎

錦画

